

幸府画報

第 17 号

2023 年 3 月
(令和 5 年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課



バックナンバーはこちらから

調査見聞

絵師調査報告書ができるまで

報告書を出すまでが調査の仕事

調査の内容や成果をとりまとめて整理し、ひろく周知を図るために重要なのが、調査報告書の刊行です。平成 26 年(2014)に開始した絵師調査事業はまもなく丸 9 年が経過しますが、調査と並行してこれまでに『齋藤秋圃・梅圃関係資料』(平成 30 年)と、『吉嗣家資料【印章編】』(令和 2 年)の 2 冊の報告書を刊行し、現在は吉嗣家の書画調査をまとめた報告書制作中です。この報告書は、絵師として活躍した吉嗣梅仙、その息子で文人の拜山、拜山の息子で同じく文人だった鼓山の吉嗣家 3 代を中心とする作品と、吉嗣家に贈られたと思われる諸家の作品をまとめたものです。総数千点以上、確認できる人名は 500 名を超え、多様な作品類を掲載する予定です。



図 1 制作中の報告書原案

報告書制作のながれ

文化ふれあい館・太宰府市公文書館で一時的に預かりした資料が報告書になるまで、次のような長い過程があります。前段階としてクリーニングをしてから実物を調査しますが、資料の大きさの測定、材質形状、何が書かれているのか、1点ずつ調査に記録していきます。くずし字や篆書といった見慣れない文字と格闘しながら解読し、最後に記録写真を撮ります。



図 2 『齋藤秋圃・梅圃関係資料』

資料の調査作成が終わると、PC にデータとして入力していきます。データ化することで、制作者、作成年代など、バラバラだった資料を系統づけることができ、新たな発見につながります。次にデータをもとに、どんな報告書にするか検討しながら原案を作成します。画稿が中心の齋藤家資料の場合は似た絵柄をまとめて一覧できる形式にしました(図 2)。吉嗣家資料【印章編】の場合は 1 点 1 点の印についてカード形式で情報をまとめ、さらに実寸の印影を掲載して利用の便を図りました(図 3)。掲載する資料にあわせてどういった配置が適切か試行錯誤しながらレイアウトを考えていきます。

原案ができたなら、印刷会社とやり取りをして校正を複数回おこない、完成となります。資料を借用してから報告書が完成するまで、齋藤家資料は丸 4 年、吉嗣家資料は 7 年以上と、多くの時間をかけつつ、多くの専門家や関係者にご協力いただいています。

報告書制作の意義

完成した報告書は絵師調査事業の成果記録にとどまらず、関連資料を有する他市町村の文化財調査にも有益なものとなります。資料からは地域の歴史や風土に関するさまざまな情報を得ることができ、郷土の歴史の再発見や活性化のための参考書にもなります。

報告書の刊行とともに、資料展示や本誌『幸府画報』などからの発信を増やし、今後は資料を素材としたグッズ販売なども視野に入れつつ、より太宰府の絵師について知ってもらえるよう取り組みたいと思います。(木村純也)



図 3 『吉嗣家資料【印章編】』

メイショ メイブツ 菫萱の関跡

菫萱の関は大宰府にあった関所です。10 世紀初頭、大宰府に左遷された菅原道真の和歌に「刈萱の関守にのみ見えつるは人もゆるさぬ道辺なりけり」と見え、その後、歌枕(古くから和歌に詠み込まれた諸国の名所旧跡)となりました。また、説教「かるかや」や謡曲の「菫萱」の登場人物である菫萱道心もこの地の人とされています。

関所としての実態は、大内氏が筑前国守護となった室町・戦国時代に散見されます。永享 10 年(1438)、博多商人奥堂弥二郎大夫に対し、宮崎宮・櫛田宮・住吉宮へ送られる油の過銭(通行料)が先例により免除されています(油座文書写)。また、文明 12 年(1480)、筑前を旅した連歌師宗祇がこの関所を通行する際、関守がこちらをあやしげに見る様子に「数ならぬ身をいかにもも事問はばいかなる名をか刈萱の関」と詠んでいます(『筑紫道記』)。

図版は吉嗣梅仙作図、拜山作詩『太宰府廿四詠』(1884 年成立)の「萱関」の項目です。福岡城から日田へ至る日田街道が御笠川を渡る手前で、街道から分かれて太宰府天満宮への参詣道が始まる位置、現在の関屋の石灯笼・鳥居がある付近に菫萱の関があったと考えられていたことが分かります。(朱雀信城)



『太宰府廿四詠』

逸品探訪

大宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介いたします

齋藤秋圃作

【楊柳観音図】

病を治す観音さま

千手観音、十一面観音、如意輪観音などというように、観音菩薩は様々に姿を変えて人々を救う仏として信仰され、仏像や画像にあらわれます。本図は、白い衣を着ていることから白衣観音のようにも見えますが、花瓶に柳の枝が見えることから、病を治すとして信仰された楊柳観音を描いたものとわかります。

画面向かって右下に、秋圃作品によく用いられる「煉圃」印が捺され、右上には仙厓の愛弟子で博多聖福寺の第124代住持をつとめた湛元等夷（？〜1855）が賛を記しています。

学習の痕跡

齋藤家資料の中には、模写や下書きなど様々な画稿があり、秋圃の作品研究に役立つとされていますが、本図を考える上でも参考となる資料を見いだすことができます。

一見すると本図の下描きのように見える右図は、画中に「尚信筆」と墨書があり、



紙本着色 掛幅装
135.5 × 64.0cm
江戸時代後期 個人蔵

【賛】※左から読む
前扶桑最初禪窟湛元拜題
具足神通力
能救世間苦
石床畳夏色
瓶柳貯春容

『齋藤秋圃・梅圃関係資料』（2500円）と、『吉嗣家資料【印章編】』（1500円）は文化ふれあい館、大宰府展示館で好評発売中です。



齋藤家資料の画稿

で、このような種々の素材を用いて作品ができあがったものと考えられます。

秋圃の個性

秋圃の作品は、それが神仏を描くものであっても、どこかにクスツと笑える雰囲気があることが特徴のひとつですが、本作品にそのような感じはありません。しかしよく見ると、岩に垂れかかる衣の先端や、柳枝のしなやかな描線など、秋圃作品に一貫した筆づかいが確認できます。また、白黒を基調とした画面の中で、花瓶を鮮やかな青色として際立たせる感性など、随所に秋圃の個性が表れています。

病苦を除く力があるとされた楊柳観音。90年の長寿を得た秋圃には大きな御利益があったのかもしれませんが。（井形栄子）

【寿老人図】

齋藤家資料
いちまい 賞鑑稿画

グーグーグー…といびきが聞こえてきそうな、幸せそうな寝顔の老人。そして、何か言いたげな瞳でこちらを見ながら、背中にずつしりとかかる重みを仕方なく受け止めている白鹿。吉祥図としてポピュラーな寿老人と鹿が、まるで電車で隣の人もたれて居眠りしている人のようにあらわされた、ユーモラスな作品です。



紙本墨画淡彩 58.6 × 39.4cm
天保3年 (1832)

七福神の一人として親しまれている寿老人は、長寿を象徴する寿星という星の化身で、もともとは道教の神です。本図のみどころは繊細

な人物・動物表現です。鹿は、頬やお尻の毛は細線で、尾や背の黒い毛はざっくりと筆側で描き、角は筆のかすれと茶色の薄塗りで質感を出しています。さらに頸や脚の重なり部分に薄く朱を塗って温かみのある白さを強調しています。熟睡する寿老人は、身体の輪郭は淡墨の略筆、衣文は太く粗い墨線で描き分けています。左手に持った団扇は鮮やかな青のグラデーシヨン、帯と鹿の蹄は深い青色、衣の内側は黄色を暈しています。黄と青のコントラストが爽やかです。

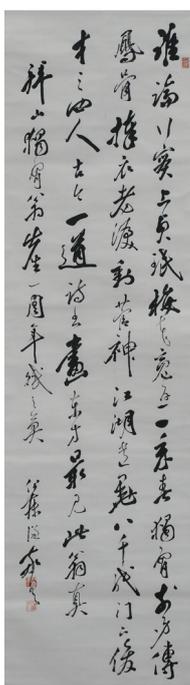
【書・画】

ひとこと
くずし字

現在制作中の報告書にちなみ、「書画」のくずしをみてみます。画面中央の画像は「書画」と書かれています。「書」は大きく崩れていて「土」のようにも見えます。「画」の旧字体は「画」の旧字体で、一見「書」のように見えますが、よく見ると漢字の下半分は「日」ではなく「田」と「一」が書かれています。「昼」の旧字体として「畫」という字もあり、非常に紛らわしいのです



が、字形や文脈から判断して解説します。この書は広島県の漢詩人である伊藤篤城が嗣家に拜山没後1周年に際して贈ったものです。伊藤は吉嗣拜山・鼓山父子と親交があったようで5点の作品が吉嗣家資料で確認されます。拜山は明治43年（1910）に広島を訪れ、ここで初めて伊藤と対面したようです。広島旅行中に読んだ詩をまとめた資料である「藝備游草」には、現地の文人との交流が記されており、詩の贈答、合作の制作が行われたことが分かっています。（木村純也）



伊藤篤城作《七言律詩》
大正5年(1916)
「吉嗣家資料」より